

## アドレリアン・リフレクティング・ワークとは何か？

梅崎一郎（徳島）

### 要旨

キーワード：

### 0. はじめに

アドラー心理学を学ぶということは、言い換えると共同体感覚を育成するということだと思えます。共同体感覚とは説明するのが非常に難しい概念ですが、誤解を恐れずに表現すると「共同体に対して貢献する方向に向かう行動が善であり、破壊する方向に向かう行動が悪である」<sup>(1)</sup>という価値観です。ここで注意を要するのは、あくまでも学習者自身が自らの共同体感覚を育成しようと決心し、そして共同体感覚を育成するプロセスでは多くの仲間や指導者の助けを借りることになるのだという理解だと思えます。何が言いたいのかというと、共同体感覚の育成というのは、他の人から強制されるものではなく、本人自身の主体的決断によってのみ手に入れられるプロセスである、と同時に独りでは学べないプロセスでもあるということです。

ところで、このような本人自身の生き方の問題について他人が入っていくというのは特殊な事態であるという認識が必要であると思えます。カウンセリングや心理療法というのは、治療契約が結ばれ治療構造を適切に作ることで、そのような特殊な事態に入っていくように配慮されているといえます。しかし、自助グループではどうでしょうか？自助グループがアドラー心理学を学ぶ場としてある以上、当然その場は共同体感覚育成の場であるはずですが、そのような場に参加される方に対して、ある種の参加契約のようなものが必要だと思われれます。それは議論の難しい微妙な問題ですが、近年関心が持たれて来ている、自助グループにおける専門性や治療力の育成という課題の浮上は、このようなテーマについての議論の必要性を高めてきていると言えるでしょう。また、アドラー心理学の文脈の中において、自助グループというものをどのように認識していけばよいのかという問題もあるように思えます。このテーマについては稿をあらためて書いてみたいと思えます。

さらに、自助グループが共同体感覚育成の場であるということは、自助グループを運営している人たちが共同体感覚が何であるかを知っており、その人たちによって共同体感覚が育成され実践されている場を創りだしている必要があります。しかしながら、共同体感覚が何であるかを知っていることと、共同体感覚を育成・実践する場を創りだすことの間には技術的な壁があるように思われれます。それは、ひとつには自助グループ運営者（援助者）の共同体感覚の育成とそれを実現するための技術の問題があります。簡単に言うと自助グループ運営者が援助する技術を持っていなければ、いかに共同体感覚を育成・実践しようとしても援助はできないということです。それともう一つは、援助技術があっても共同体感覚がない人たちにその技術が使用されると非常

に危険であるという問題があります。

残念なことに徳島では共同体感覚を育成・実践する場を創ることに失敗してしまった歴史を有してしまいました。<sup>(2)</sup> その失敗からアドラー心理学を学び直し、共同体感覚を育成・実践していける場をどのように創って行けばよいのかをあらためて考え工夫しなければならなくなりました。その過程で、エマニュエル・レヴィナス Emmanuel Levinas の思想やノルウェーの家族療法家トム・アンデルセン Tom Andersen のチームが創始したリフレクティング・チーム Reflecting Team (現在はリフレクティング・プロセス Reflecting Processes と呼ばれている) の構想から重要な示唆を受けました。さらに、2006 年に入ってからアドラー心理学指導者野田俊作氏が全国で実施されたグループ・セラピーの体験や 2006 年 11 月 18 日広島県福山市で開催された第 4 回中国地方会の体験からも貴重な学びがありました。これらの体験や学びを地元の徳島アドラー心理学研究会や自助グループ那賀みちの会の協力を得て、自助グループの場が共同体感覚の育成と実践を実現する場としてどのような方法を工夫できるのかを試行錯誤しながら構想したものをアドレリアン・リフレクティング・ワーク (Adlerian reflecting work : 以下「ARW」) と命名しました。つまり、ARW は自助グループ活動の中で、共同体感覚の育成・実践を支える技術を育てる方法のひとつとして構想されたわけです。

ARW の本格的な試行は、2007 年 1 月 20 ～ 21 日に合宿ワークショップの形で実施し、また 2007 年 2 月 17 日に開催された第 9 回四国地方会において ARW Lesson 1 を実施しました。その後、参加者から多くの貴重なご意見をいただくことで、実施方法や理論的裏付けなどについて一部修正を行うことができました。まだまだ改善の余地はありますが、この度アドレリアン誌上で発表させていただくことで多くの自助グループ活動の中で活用していただき、様々なご指摘をいただくことでさらに役に立つ方法に練り上げていければと考えております。

以下に、ARW の実施目的及び方法を説明し、その後に理論的解説を行います。

## 1. ARW の目的

ARW を構想した目的は先に書いたように自助グループ活動の中で特にコーディネーター役を担う方の共同体感覚を育成・実践を実現するための技術を育てることです。そのことをもう少し具体的にいうと、ARW とは自助グループの運営方法のひとつであり、そしてグループの中で事例を提供された方の語る問題のその方特有の構成の仕方をグループメンバーが適切に把握するところまでを、事例提供者を適切に保護しながら、特に重点的に練習することが大きな目的となります。これは、野田俊作氏がグループ・セラピーのプロセスで「問題の共有」の段階と呼ばれているものに相当します。

## 2. ARW の実際

ARW は 3 つのテーマを掲げながら、独特のグループ構造を持ち、基本的な 2 つのレッスンから成っています。また基本的なレッスンに入る前には必ずウォーミングアップを行います。それから、必要があればウォーミングアップの後にデモンストレーションを行った方がよい場合がありますので併せて説明いたします。

## 2 - 1 . ARWの3つのテーマ

### 2 - 1 - 1 . 相手の関心に関心を向け続ける

共同体感覚を育成するためには、その人にとっての共同体とは何で、共同体にとってその人のどのような行動が貢献的であるのかがわからなければなりません。自助グループに参加されて、自分の問題を相談されているメンバーさんのお話を伺う中で、そのメンバーさんの相手役が誰であり、その相手役との関係（共同体）において、そのメンバーさんにとって可能な貢献的な行動が発見され、実行する勇気が生まれてくるようにグループの中で語られるように援助していくわけです。

それが可能になるためには、まずアドラーの言葉に従う必要があります。それは、「相手の関心に関心を持つ」ということです。アドラー心理学は主観主義的な心理学ですから、他人の気持ちができるというのは原理的に不可能です。つまり、いくら「相手の関心に関心に向けて」も他人は永遠に謎でしかありません。しかし、相手の関心に関心に向けている間は、他人は私に様々な様相を見せてくれます。そのうちに、相手がどのような（主観的）世界に住んでいて、その世界でどのように暮らしたがつているのか、あるいは生きてがつているのが実感としてわかったような気がしてきます。これは、あくまでも私の推量であって事実ではありませんが、その推量ができるようになることで、その人が気がついていない世界の有り様やその人自身の貢献的な力に私の関心は向けられるようになっていきます。そして、そのことについて話し合うことが可能となってきます。

ここで議論を精密にできるように《推量》と《思いこみ》とを区別しておきたいと思います。「相手の関心に関心を向ける」というのは、《推量》している状態です。《推量》というのは、相手が語ったいくつかのエピソードをひとつのパターンで了解可能ではないかと仮説を携えている状態であり、それは弱い予測から強い確信となる場合がありますが、あくまでも仮説として携えておく状態のことです。《思いこみ》とは、ひとつのエピソードもしくはエピソードも聴かないで、根拠なく、あるいは乏しい根拠だけで相手のことを了解できたと直感的に確信を持つことだとしてここでは定義しておきます。別の言い方をすれば、《推量》とは別の可能性に対して開かれている状態を表していますが、《思いこみ》とは別の可能性に対して極端に閉じられてしまっている状態だといえます。

ARW の最も重要な目的は、自助グループメンバーが話題提供者に対して、適切な《推量》ができるだけ可能となるように、あるいは《思いこみ》に落ち込まないように、さらには不十分な《推量》や《思いこみ》を携えてしまったとしても破壊的な影響を話題提供者やグループ全体に及ぼさないように技術的に支援することです。

### 2 - 1 - 2 . 開いた質問を創造する

「相手の関心に関心を向け続ける」ということを可能にするためには、相手の関心が語られるような開いた質問を生み出さなければなりません。つまり、相手の関心に関心に向けているというのは、相手に対して問いを持っているということ、それが私の関心だけでなく相手の関心でもあるためには、それは開いた質問でなければならないということです。何故なら、閉じた質問はひとつの《推量》に対して二つの可能性しか与えてくれません。これは、極端に相手の（主観的）世界を狭めてしまう可能性が高く、私が相手に対してある《思いこみ》を持っているというメッセージを相手に伝えてしまいます。開いた質問はあくまでも「相手は謎である」を前提にしてお

り、そして相手の謎に対する敬意を保ちやすくさせます。喩えて言うと、開いた質問というのは、相手の心の扉をノックするような行為であるように思います。ただ、私はノックはできるけれども扉の中に入ることはできません。心の中は覗けないわけです。でも、開いた質問というノックをすることで、相手の心の扉が開き、そこから大切な語りが生まれてくる可能性があります。相手が語りだすのを待つことができるようになるというわけです。相手の心のどの扉を、どんな風にノックすれば、共同体感覚が育っていくような語りが生まれてきそうなのか？ そのことを探しながらノックしていくわけです。それができている時、私は共同体感覚を実践することが辛うじて可能になっているように思います。そのことをARWでは「相手の役に立つ開いた質問とはどのようなものだろうか？」という問いを参加者が全員が携え、探し、生み出していくことに費やすのだと表現します。

### 2 - 1 - 3. 開いた質問を創造するためのシェアリング

そして、ARW の最も方法的特徴はシェアリングのあり方にあります。すべてのシェアリングは「相手の役に立つ開いた質問」を探しだし、生み出すことに費やします。つまり、参加者一人一人の頭の中には、話題を出された方の行動の目的やライフスタイルについての推量がなければなりません。推量内容そのものは絶対に話題にしないということを守っていただきます。常に、「どのような開いた質問が話題を出された方の役に立ちそうなのか？」だけを話し合うようにします。上記の喩えで言えば、扉の中がどうなっているのかを話題にするのではなくて、どのようにノックをすれば扉から素敵な物語が生まれそうなのかを話題にするということです。これは、ARW において徹底して守っていただくルールになります。

### 2 - 2. グループの構造、あるいはメンバーの役割

ARW では、グループメンバーは次の述べる三つの役割のどれかを必ず担って参加します。

#### 2 - 2 - 1 . かたり手

「かたり手」とは、グループの中で相談する人のことです。

#### 2 - 2 - 2. たずね手

「たずね手」とは、「かたり手」に直接インタビューする人のことです。

ここで、「聴き手」と言わないのには理由があります。それは、聴き手という語感がある意味「問いかけるという行為」の能動性を隠蔽するような響きを感じるので、それを避けたかったのが大きな理由のひとつです。また、「たずねる」というのは、「尋ねる」でもあり、「訪ねる」でもあり、「温ねる」でもあると考えています。極めて能動的な行為であるということを意識しておきたいと思います。

#### 2 - 2 - 3. たすけ手

「たすけ手」は様々な役割を担っています。「たすけ手」は直接「かたり手」と話し合うことはしません。このため「たすけ手」は「たずね手」とは明らかに違った心理的距離で「かたり手」

と向き合うことになります。そういう意味では、「たずね手」とは違った観点で「かたり手」の語りに耳を傾けることができます。それだからこそ役に立つ質問を創り出す可能性が広がるともいえます。ARW において「たすけ手」が機能するかどうかで、ワークが機能するかどうかが決まるといっても過言ではありません。本当に適切な距離から必要な「問いかけ」を持ってきてくれる人のことです。

## 2 - 3. ARWの流れについて

ここでは ARW の流れについて、ウォーミングアップ、デモンストレーション、そして ARW の基本的な2つのレッスンの実施方法を説明します。

### 2 - 3 - 1. ウォーミングアップ

どのようなグループワークにおいてもウォーミングアップは非常に重要な作業になります。ARW においても同様に極めて重要な作業になりますが、ARW を実施する上でコーディネーターは一般的なウォーミングアップの重要な作業以外に、次あげる作業をしていく必要があります。

- 1) ワーク実践の場となる3～7人程度の小グループを作る。
- 2) 小グループを作るプロセスは、必ず参加者が主体的に < 選択 > してグループが作られるように勇気づけていく。
- 3) グループ全体がリラックスして、参加者一人一人がグループに所属している実感が高まってくるようにサポートする。

以上の条件が満たされるようなアプローチであれば、どのような手法を用いても原則的には問題ありません。私がグループ作りのコーディネイトする際には、「今日相性のよい人とペアを作ってください」などと指示をだす場合があります。いま一緒に作業をしたい人を選んでもらうように勇気づけていきます。余ってしまった人は、すでに出来上がったグループのうち参加したいグループを選んでもらいます。また、参加者のグループへの所属感を高めていく方法としてある種の瞑想法を使ったり、呼吸を合わせるワークを用いたりすることがあります。

ウォーミングアップ全体で20～30分の時間をかけて行います。

### 2 - 3 - 2. デモンストレーション

全く初めて ARW を実施する場合には、デモンストレーションを実施した方がよいと思いますが、無理に実施しなくてもかまいません。デモンストレーションを実施する場合には、「かたり手」「たずね手」「たすけ手」それぞれ一人ずつ、計3名のグループで実施するのがわかりやすいだろうと思います。

デモンストレーションで実施するのは基本的に前半のインタビューの部分だけになりますが、デモンストレーションを実施する場合に最も大事なことは、「かたり手」は本当に相談したいことを相談するということと、デモンストレーション後のフォローが十分できる体制を用意しておくことです。

## 2 - 3 - 3. ARW Lesson 1

### I：グループの構造について

- i) 3～5人のグループを作る。
- ii) 「かたり手」一人、「たずね手」一人、残りのメンバー全員が「たすけ手」となるように役割を決めます。

#### iii) 役割の確認

##### かたり手：

- ①ここで相談してもいいなと思うことを、あるいはちょっと気になるなと感じていることを話す。
- ②話を聴いてもらいたい「たずね手」を選ぶ。
- ③「たずね手」から届いた質問について、次の2つはキャンセルできます。

A：閉じた質問

B：気に入らない質問

気に入らない質問というのは、答えたくない質問や意味のわからない質問なども含まれます。

##### たずね手：

- ① 質問するときは喋れない。
- ② 質問は附箋に一つずつ書いて「かたり手」に手渡す。
- ③ 質問は必ず開いた質問でなければならない。
- ④ 開いた質問が思い浮かばなくなったり、質問が続けて2回機能しなかったなと感じたら、「たすけ手」に声を出して相談できる。
- ⑤ 話し合う内容は、「かたり手にとって役に立つ質問は何か？」についてだけである。
- ⑥ 話し合いは「かたり手」にもきちんと聞こえるようにしっかりと話し合う。
- ⑦ いろいろ意見が出て、「たずね手」がどのような質問をしたいかが決まればインタビューに戻る。
- ⑧ どのような質問を選ぶかはあくまでも「たずね手」であること。

##### たすけ手：

- ① 「かたり手」から手渡された附箋をボードに順番に貼っていく。
- ② インタビューを聴きながら、どのような質問が役に立っているのか、あるいはどのような質問が役に立ちそうなのかを注意深く聴いている。
- ③ 「たずね手」から「助けて」と要請があったときに、初めて「たすけ手」は自分の意見が言えるが、「かたり手」とは話せない。話せるのは「たずね手」とだけである。
- ④ 話し合う内容は「かたり手にとって役に立つ開いた質問は何か？」についてだけである。

### II：セッションの流れ

#### i) 第1ステージ＝インタビュー（設定時間：15～20分）

- ① 「たずね手」が「1. どのようなお話しでしょうか？」と附箋に書いて「かたり手」に手渡す。

- ② 「かたり手」がどのような（主観的）世界に住んでいるのかが、「たずね手」に見えてくるように開いた質問をしていく。
- ③ それから「かたり手」がその世界の中で、どのように生きてがっているのか、暮らしたがつているのかが語られるように開いた質問をしていく。
- ④ そして「かたり手」の語りが、より建設的で願いに叶った語りに語り直されていくように開いた質問をしていく。
- ⑤ 「たずね手」は開いた質問が思い浮かばなくなったり、開いた質問が続けて2回機能しなかったと感じたら「たすけ手」に相談する。
- ⑥ 「かたり手」にもよく聞こえるように、どのような開いた質問が「かたり手」の役に立ちそうであるかについて「たずね手」と「たすけ手」で話し合う。
- ⑦ 「たずね手」が問いかけてみたい質問が決まればインタビューに戻る。
- ⑧ 設定時間の間に「たずね手」は「たすけ手」に何回相談してもよい。
- ⑨ 設定時間が終わればお互いにお礼を言ってインタビューは終了。

ii) 第2ステージ＝シェアリング（設定時間：15分）

- ① 最初に「かたり手」がインタビューの中や「たずね手」と「たすけ手」の相談の様子から、どのような開いた質問が、どのような気づきや考えを引き出してくれたのか、あるいは役に立ったのかをメンバーにシェアする。
- ② 上記をもとにメンバー全員で、どのタイミングで、どのような質問が「かたり手」の役に立ったのだろうか？ 同じ質問でもタイミングや表現の仕方によって、どのような違いや役に立つ可能性はなかったか？ そして他に役に立つ開いた質問にはどのようなものがあるのかなのかをメンバー全員で話し合う。

### III：補足

i～iiで1クールです。1クール終わったら役割を交代して同じ要領で実施します。全体の時間によって何クールするのは調整してください。1回のセッションでは少なくとも2クールは実施した方がいいでしょう。したがって、AWR Lesson 1を実施するには最低2時間は必要だと思います。

第1ステージで「かたり手」の問題が設定時間内に解決した場合には、すぐに全体のシェアリングに入ります。

#### 2 - 3 - 4 . ARW Lesson 2 -A

ARW Lesson 2には、二つのバージョンがあります。まず、Lesson 2 -Aから説明します。

#### I：グループの構造について

- i) 3～5人のグループを作る。
  - ii) 「かたり手」一人、「たずね手」一人、残りのメンバー全員が「たすけ手」となるように役割を決めます。
  - iii) 役割の確認
- かたり手：

- ① ここで相談してもいいなと思うことを、あるいはちょっと気になるなど感じていることを話す。
- ② 話を聴いてもらいたい「たずね手」を選ぶ。

たずね手：

- ① 質問は必ず開いた質問でなければならない。
- ② 開いた質問が思い浮かばなくなったり、質問が続けて2回機能しなかったと感じたら、「たすけ手」に声に出して相談できる。
- ③ 話し合う内容は、「かたり手にとって役に立つ質問は何か？」についてだけである。
- ④ 話し合いは「かたり手」にもきちんと聞こえるようにしっかりと話し合う。
- ⑤ いろいろ意見が出て、「たずね手」がどのような質問をしたいかが決まればインタビューに戻る。
- ⑥ どのような質問を選ぶかはあくまでも「たずね手」であること。

たすけ手：

- ① インタビューを聴きながら、どのような質問が役に立っているのか、あるいはどのような質問が役に立ちそうなのかを注意深く聴いている。
- ② 「たずね手」から「助けて」と要請があったときに、初めて「たすけ手」は自分の意見が言えるが、「かたり手」とは話せない。話せるのは「たずね手」とだけである。
- ③ 話し合う内容は「かたり手にとって役に立つ開いた質問は何か？」についてだけである。

## II：セッションの流れ

### i) 第1ステージ＝インタビュー（設定時間：40分）

- ① 「たずね手」が「どのようなお話しでしょうか？」と「かたり手」に丁寧にまず尋ねる。
- ② 「かたり手」がどのような（主観的）世界に住んでいるのかが、「たずね手」に見えてくるように開いた質問をしていく。
- ③ それから「かたり手」がその世界の中で、どのように生きてがっているのか、暮らしたがつているのかが語られるように開いた質問をしていく。
- ④ そして「かたり手」の語りが、より建設的で願いに叶った語りに語り直されていくように開いた質問をしていく。
- ⑤ 「たずね手」は開いた質問が思い浮かばなくなったり、開いた質問が続け2回機能しなかったと感じたら「たすけ手」に相談する。
- ⑥ 「かたり手」にもよく聞こえるように、どのような開いた質問が「かたり手」の役に立ちそうであるかについて「たずね手」と「たすけ手」で話し合う。
- ⑦ 「たずね手」が問いかけてみたい質問が決まればインタビューに戻る。
- ⑧ 設定時間の間に「たずね手」は「たすけ手」に何回相談してもよい。
- ⑨ 設定時間が終わればお互いにお礼を言ってインタビューは終了。

### ii) 第2ステージ＝シェアリング（設定時間：15分）

- ① 最初に「かたり手」がインタビューの中や「たずね手」と「たすけ手」の相談の様子から、どのような開いた質問が、どのような気づきや考えを引き出してくれたのか、あるいは役に立ったのかをメンバーにシェアする。



- ② 上記をもとにメンバー全員で、どのタイミングで、どのような質問が「かたり手」の役に立ったのだろうか？ 同じ質問でもタイミングや表現の仕方によって、どのような違いや役に立つ可能性はなかったか？そして他に役に立つ開いた質問にはどのようなものがあるのかなのかをメンバー全員で話し合う。

### Ⅲ：補足

i～iiで1クールです。1クール終わったら役割を交代して同じ要領で実施します。全体の時間によって何クールするのかは調整してください。1回のセッションでは少なくとも2クールは実施した方がいいでしょう。したがって、ARW Lesson 2を実施するには最低3時間は必要だと思います。

第1ステージで「かたり手」の問題が設定時間内に解決した場合には、すぐに全体のシェアリングに入ります。

#### 2 - 3 - 5 . ARW Lesson 2 -B

##### I：グループの構造について

- i) 5～7人のグループを作る。
- ii) 「かたり手」一人、「たずね手」一人、残りのメンバー全員が「たすけ手」となるように役割を決めます。
- iii) 役割の確認

かたり手：

- ① ここで相談してもいいなと思うことを、あるいはちょっと気になるなど感じていることを話す。
- ② 話を聴いてもらいたい「たずね手」を選ぶ。

たずね手：

- ① 質問は必ず開いた質問でなければならない。
- ② 開いた質問が思い浮かばなくなったり、質問が続けて2回機能しなかったと感じたら、「たすけ手」の意見を聴いてみませんか？と「かたり手」に提案する。
- ③ 「たすけ手」が話し合っている内容を、「かたり手」とともに黙って聴く。
- ④ 「たすけ手」同士のシェアリングが終わったら、「かたり手」と向き合い、「今のたすけ手さんたちのお話を聴いていて、気がついたことやお話しされたくなったことがあったら教えていただけますか？」と問いかける。

たすけ手：

- ① インタビューを聴きながら、どのような質問が役に立っているのか、あるいはどのような質問が役に立ちそうなのかを注意深く聴いている。
- ② 「たずね手」から「助けて」と要請があったときに、初めて「たすけ手」は自分の意見が言えるが、「かたり手」や「たずね手」とは話せない。話せるのは「たすけ手」同士だけである。また、話し合うときは「かたり手」や「たずね手」の方を見ないように注意する。
- ③ 話し合う内容は、これまでの会話で、どのような質問がかたり手の役に立っていたと思うか、どのような質問が役に立ちそうなのかについて話し合う。

## II：セッションの流れ

### i) 第1ステージ=インタビュー（設定時間：40分）

- ① 「たずね手」が「どのようなお話でしょうか？」と「かたり手」に丁寧にまず尋ねる。
- ② 「かたり手」がどのような（主観的）世界に住んでいるのかが、「たずね手」に見えるるように開いた質問をしていく。
- ③ それから「かたり手」がその世界の中で、どのように生きてがっているのか、暮らしたがつているのかが語られるように開いた質問をしていく。
- ④ そして「かたり手」の語りが、より建設的で願いに叶った語りに語り直されていくように開いた質問をしていく。
- ⑤ 「たずね手」は開いた質問が思い浮かばなくなったり、開いた質問が続けて2回機能しなかったと感じたら、「たすけ手さんの意見を聴いてみましょう」と「かたり手」に提案し、「たすけ手」同士の話し合いに、「かたり手」とともに注意深く聴く。
- ⑥ 「たすけ手」は、「かたり手」と「たずね手」にもよく聞こえるように、どのような開いた質問が「かたり手」の役に立ちそうであるかについて話し合う。また、話し合う際には、「かたり手」や「たずね手」の方を見ないように注意する。
- ⑦ 「たすけ手」の意見が出終わったら「たすけ手」は「かたり手」と「たずね手」の方に向き直る。そして、「たずね手」は「かたり手」に「今のたすけ手さんたちのお話を聴いて、気がついたこと、あるいはお話しなさりたくなかったことがあれば教えていただけますか？」と切り出しインタビューを再開する。
- ⑧ 設定時間の間に「たずね手」は「たすけ手」に何回相談してもよい。大体1～2回くらいになることが多い。
- ⑨ 設定時間が終わればお互いにお礼を言ってインタビューは終了。

### ii) 第2ステージ=シェアリング（設定時間：15分）

ARW Lesson 2 -Aと同様。

## III：補足

ARW Lesson 2 -Aの補足と同様であるが、ここでLesson 2のAとBのどちらを実施するかの方決定方法についても補足しておきます。AとBのどちらの方法を選ぶのかについては2種類の方法があります。ひとつは「たずね手」が選ぶ方法で、もう一つは「かたり手」が選ぶ方法です。ARWの体験が何度かある方が「かたり手」をされる場合には「かたり手」が選んでもよいと思いますが、多くの場合は「たずね手」が判断するのがよいと思います。それではAとBの選び方はどのようなのかという問題もありますし、さらには一回のセッションの中でAとBを使い分けることも可能だと思われれます。これらの方法の適用条件等については今後研究してみる予定です。

## 3. 解説

### 3 - 1 . リフレクティングとは何か

ARWにおけるリフレクティング“reflecting”とは、ノルウェーの家族療法家であるトム・ア

ンデルセン Tom Andersen らのチームにより創始された Reflecting Team（現在は Reflecting Processes と呼ばれている）から拝借した用語であり、その意味するところは英語よりもフランス語の réflexion と同じ意味で使用している。すなわち、「相手の言葉を聞き入れ、それについて考えをめぐらし、それをまた相手に返す」作業を意味する。<sup>(3)</sup> ARW はリフレクティング・プロセスの思想と方法の一部に影響を受けている。トム・アンデルセンはリフレクティング・チームを開始する前はミラノ派の家族療法を行っていたが、その方法や基本的な姿勢に対して馴染めなかったと語っている。<sup>(4)</sup>

面接のセッションの合間に、われわれはなぜ家族から離れて部屋を移るのだろうか？ われわれの間で、その家族について話し合いを、なぜ秘密にしようとするのだろうか？ 治療チームは家族と共に居るべきでは、そして、われわれがどのように問題に対処してゆくか家族に見せるべきではないだろうか？ 家族にそういう経過を見てもらうことによって、家族が自分たち自身の答えを見つけてゆくのではないか？ 私たちは、話し合いの内容を家族に対しオープンにするだけの勇氣は最初はなかった。それというのも、チームの会話の中には家族に失礼な表現が多くあったからだ。たとえば、「このような口うるさい母親の家庭に生まれなくて僕はよかった」とか、「あんな頑固な男との結婚生活って、いったいどんなんだろうか」等、失礼な言葉が家族の前で話す際、容易に出てしまうだろうと想像した。1985年3月のこと、これらの恐れにもかかわらず、私たちはすべての会話をオープンにしてしまった。その日、ワンウェイ・ミラーの向こうから面接のやりとりを聞いていたチームが、面接中の家族と担当者に、今度はチームのやりとりをこちら側から聞くようにと提案した。これまでの面接の印象について、こちらが話し合いをするというものである。私が初め恐れていたことは、心配には及ばなかった。「失礼」な言葉が飛びかうこともなく、またそういう言葉を発しないよう、いちいち気をつける必要もなかった。この日以降、私たちチームは「リフレクティング・チーム」と呼ばれた。<sup>(5)</sup>

このトム・アンデルセンの試みとその結末が教えてくれている重要なことのひとつは、グループ構造がメンバーの振る舞いを大きく変える可能性があり、そしてオープンな場の方が表現の仕方が自然と節度があり、グループ全体にとって貢献的な方向を模索しやすくなるということである。

また、トム・アンデルセンは次のようにも述べている。

人生というものを、私は自分自身と身近な環境、そしてまたそれらを取り巻くものが、ともに未来に向け前進してゆくものと見ている。そして身近に起きる人生上のいろいろな変化は、私が起こすのではなく、変化すべくして起こっている。私のできることは、ただそれに参与することだけである。参与するとは、今までの自分の経験から得た理解と行為のレパトリーの使い方を学ぶことである。大切なのは、いつもやっていることの繰り返し以外にも、可能性があることを知ることだ。私にこの考えができたのは、ハロルド・グーリシャンと接したお陰である。彼曰く、「こう対処すべきだという知識を持つと、それはわれわれを制限する。こうすべきではないということについてもっと深く知っていれば、そこに無限の対処の可能性はある」。どのように自分のレパトリーを使うかは、どのように自分がその時その場に参加しようとしているかに関わり、どのようにその場を理解するかは自分がその場をどう記述するかに関わっている。私が記述することは、私が目を向け、焦点を当てていることである。われわれの人生のひとコマひとコマは、とても豊かで多層なものを含んでいて、すべて同時に注目し焦点を当てることは不可能である。意識的にせよそうでないにせよ、一瞬一瞬何に気を配るか選択が必要である。つまり、われわれ

は、自分の気に止めていないことや、焦点を合わせていないことについて、気づいたり記述したりはできない。私の理解もその説明も言葉の中で形づくられ、自分の使う言葉のレパートリーによってのみ支えられている。つまり、私は言語の許す範囲内でしか物事に留意したりすることはできない。<sup>(6)</sup>

ここでトム・アンデルセンが述べていることを整理してみると、私には私の人生の課題があり、それは言い方を変えれば世界全体のある部分を受け持たせていただいているというある種の自覚が大切であるということ。そして私は私の仕事を特定のやり方でこなしてしまっているが、実はそれ以外にもやり方は結構あるのだということを知っておくこと、そしてそのような私のやり方の制限とは私の言葉遣いによって縛られているということである。ここでいう言葉遣いというのはライフスタイルとほぼ同義として考えてもよいと思われる。

自助グループを運営していくということは、違うライフスタイルを有した人が集っている状況にあるわけであるが、ひとつのテーマについて数人が語ればその内容は大きなものから微妙なものまで必ず差異を浮かび上がらせる。つまり、自助グループにおいては参加者のライフスタイルの違いが、話題提供者の知らなかったことへの気づきを促進する可能性があり、グループの中での役割の差異がさらにそれを促進する可能性があるのではないかということである。そして、グループの構造化が参加者の聴き取りに差異をもたらすことは、後に共同体感覚を育成する上でも大きな助けになることを示したい。

### 3 - 2 . レヴィナスの思想と共同体感覚

エマニュエル・レヴィナス Emmanuel Levinas の思想について私ごときが何か語れるわけではないが、レヴィナスの思想に触れ、私なりに理解し、そしてこの度ARWを構想するにあたって極めて助けになった思考について語ってみたい。

#### 3 - 2 - 1 . 《他我》と《他者》

レヴィナスは、他人を《他我》と《他者》に区別して考えている。《他我》というのは、もともとはフッサールの用語である。

私は他我を同時に、この世界に対する主観として経験する。すなわちわたしは他我を、この世界、つまり私自身が経験するのと同じこの世界を経験し、そのさいわたしをも、すなわち世界を経験しその世界の中において他我を経験するものとしてのわたしをも経験するものとして、経験する。<sup>(7)</sup>

つまり、他我とは私と同じ資格で、私とは違う仕方で世界を経験しているをことを私が確信しているような他人のことをさしている。これは日常的な他人経験である。しかも、私の世界体験そのものが、このような他我を前提にしないと成立しないということを示している。このことをレヴィナス研究者でもある内田樹氏は「主観性はそのつどすでに間主観性である」と表現している。アドラー心理学的に言えば、他我とは私の世界像ということになる。つまり、私が理解している他人のことである。ということは、「私が推量している他人」も「私が思いこんでいる他人」も同じく他我である。

それでは《他者》とは誰か？ レヴィナスは次のように書いている。なお、レヴィナスの記述

は難解であるので2種類の訳を併記して参照する。

絶対的<他>、それが他者である。<他者>は私と数的関係をもたない。私と「きみ」との共同体あるいは「われわれ」という名の共同体は複数の「私」を単に寄せ集めたものではない。私ときみ、この二つのものは同じ一つ概念に属する個体ではない。所有も数的統一性も概念の統一性も私を他者に結びつけはしない。共通の祖国の不在が<他人>を<異邦人>たらしめ、この<異邦人>が我が家を攪乱するのだ。<sup>(8)</sup>

絶対的に他なるもの、それが「他者」である。それは自我と同じ度量衡をもっては計量することのできぬものである。私が「あなたは」あるいは「私たちは」と言うときの集団性は、「私」の複数形ではない。私、あなた、それはある共通概念の個体化したものではない。所有も、度量衡の一致も、概念の一致も、私を他者に結びつけることはない。共通の祖国の不在、それが「他なるもの」を「異邦人」たらしめている。<sup>(9)</sup>

つまり、他者とは私の認識を超えている他人のことである。このような理解からすると《他我》とは、私に取り込まれてしまった他人であり、私の世界の住人である。このような他人の理解から導き出される倫理とは、「自分の望むことは他人も望み、自分が嫌うことは相手も嫌うので、自分が望むことを他人に対して行い、自分が嫌うことを他人に対して行わない」という主張しか出てこない。このような主張が力を持って他人に働きかけるとき、それは計り知れない暴力となってしまうことを歴史が証明している。しかしながら、教育や臨床心理学の世界においてはその歴史的過失に対する責任ある行動を実現しているとは言い難いと思われる。以上のことから、私の認識を超えた他者を忘れないことが、いやこのような他者に向かい合おうとする姿勢や営みが共同体感覚の育成・実践には不可欠であると考えるのである。

### 3 - 2 - 2. 自助グループにおける《非対称の関係》と共同体感覚

アドレリアンであり、禅僧でもあるマヌ・バザーノ Manu Bazzano はレヴィナスを引きながら次のように述べている。

現象学の自然の結末は、すくなくともレヴィナスがたどった道筋にそうならば、倫理である。これは《倫理綱領》(Code of Ethics)を意味しているのではない。倫理綱領は、先に述べたような意味での《他者とともに在る》ことを要求するだけで、不十分だ。《ために在る》(being for)ことが要請されるが、これは、しかし、他者に要求できるものではない。それは非対称の関係である。それは《他者》に向かう私の責任と義務から生まれてくる。《ともに在る》ことでは不十分なのだ。治療者は常に他者の《ために在る》必要がある。クライアントは「われわれ」が「私」の複数でないときにはじめて治療者と関係しあえる状態になるのだ。<sup>(10)</sup>

バザーノが指摘していることは治療関係に限らない。それは例えば自助グループの運営に関しても言えば治療関係以上に注意が必要であると言える。何故なら治療者は専門性という力をクライアントに対して持っているが、自分が力を持っていることを自覚している治療者は、つまり治療者とクライアント差異を自覚している治療者は、その専門性という力の行使に対して細心の注意を払うし、それが可能になるように治療契約というものをクライアントとしっかりと結び、治療構造に気を配る。治療契約や治療構造によってのみ治療者の倫理が保たれるわけでは決してない

が、少なくとも適切な治療契約や治療構造は治療者もクライアントも守ってくれるために機能してくれるシステムとなる。そして治療契約や治療構造の持つ最も重要な機能は治療者とクライアントの差異をしっかりと両者に意識させてくれることだろう。しかし、治療関係においてもバザーノが指摘しているとおり治療者とクライアントの非対称の関係にあることを自覚するためにはある種の工夫と努力が必要だと思われる。したがって、治療契約や治療構造という方法を通常持ち得ていないであろう自助グループというフィールドにおいて、バザーノのこの指摘は極めて困難な課題を抱えてしまうことになる。

それは、自助グループというのは参加者全員の当事者性の共有可能性というものが前提とされていることが根底にあるからである。本来当事者性というのは個人個人固有のものであり、断じて同じものはない。しかし、自助グループという場は私たちは同じ課題を抱えた者の集まりであるという認識を生みやすい。それが曲解されると自助グループという場は《私たちは同じである》という幻想を生む温床となる。このような幻想は他人に対する＜同じであること＞への強い期待を生みやすく、それが拗れると破壊的な対立が生まれてくる。バザーノが指摘していることは、自助グループにおいて考えてみると参加者全員が容易に《ともに在る》状況に停滞し、さらには「私」の複数形で「わたしたち」と語りやすくなる危うさを示している。自助グループにおいては援助する側と援助される側とは状況によって入れ替わる。ある時は援助される人であり、ある時は援助する側に立つ。このような事態は、比較的容易に当事者性を曲解し、《私たちは同じである》という意識を生み出す可能性を高める。このような《私たちは同じである》という意識を排し、当事者性の差異に十分にとどまれる工夫が技術的に求められるだろう。そういう意味では治療関係よりも自助グループにおけるメンバー相互の関係においてこそ相互に非対称の関係にあることを自覚することができるためにはかなりの技術的な工夫が必要となる。自助グループの身近さが容易に他我の不当な増殖やあるいは固定化を促しはしないかを私は気にする。

このような《私たちは同じである》というあり方をここでは『誤った連帯感』と名付けておく。『誤った連帯感』は被害者同盟あるいは不幸な仲間を欲している状態に容易にシフトしてしまう可能性が高い。不幸なのは自分だけではないという意識は、偽りの安心感を与えてくれるかもしれないが、建設的な方向性は示してくれない。このような状況をアドラーは自己欺瞞と言った。『誤った連帯感』からは建設的な行動は生まれてこない。それはどうしてか？ 私の躓きから私が救われるためには、私の知らないことを知ることが、もしくは気づいていないことに気づくことが必要不可欠である。しかるに、私と同じ人は私と同じ躓きに捕らわれている、故に私と同じことしか知らない。躓きを乗り越えること、つまり私の知らないことや気づいていないことを知らせてくれる人とは私とは違う人なのである。したがって『誤った連帯感』から抜け出すためには自分と他人の差異を受け入れなければならない。しかし、他人との差異だけでは不十分である。バザーノが語っている非対称の関係とは、もっと大きな意味が込められている。野田俊作氏はその著書の中でアドラーの共同体感覚に関しての考えについて次のように語っている。

アドラーは、共同体感覚について三つのことを言っています。

まず第一には、「私は共同体の一員だ」という感覚。『所属感』と言ってもいいでしょうね。

第二には、「共同体は私のために役に立ってくれるんだ」という感覚。『安全感』とか『信頼感』と言えば近いかな。

第三に、「私は共同体のために役立つことができる」という感覚。『貢献感』とでも言えばいいかな。彼はこの三つだろうと言っています。<sup>(1)</sup>

この記述を良く吟味してみると、『所属感』や『安全感』『信頼感』はある意味結末的な、あるいは受動的な感覚であること、そして『貢献感』だけが能動的な側面を強く有している感覚であるということである。つまり、私という主体が手にできるのは『貢献感』に支えられた行動のみです。『貢献感』とはまさに私が他人に対して『貢献』できているという感覚であり、私が他人の役に立ちたいという願いでもある。そしてそれは、他人が私に貢献して欲しいという願いでは決してない。すなわち、単に他人との差異を受け入れるだけでは足りないということ、つまり《非対称の関係》であるとは、私が他人に対して貢献できることが求められていて、その逆では決してないという差異のことである。

### 3 - 2 - 3. レヴィナスの「謎」の恩恵

ここで疑問が湧いてくる。私と他者との非対称の関係は、何故関係として可能であるのか？極めて私にとって負荷の大きいアクロバティックな関係に私はどうすれば入っていけるのか？レヴィナスは次のように書いている。

＜他者＞が、おのれの匿名性〔*incognito*〕を保持しつつ、協定や共謀の目配せに訴えることを軽蔑しつつ、私の承認を呼び求めるこの仕方、顕現することなく顕現するようなこの仕方、われわれはそれを一このギリシア語起源の用語の語源に遡って、そして現象〔*phénomène*〕の、慎みなく勝ち誇って現れること〔*apparoir*〕に対立させて一謎〔*énigme*〕と呼ぶ。<sup>(12)</sup>

「他者」がおのれの匿名性を維持しつつ、私の認知を呼び求めるこの仕方、了解や共犯性の目配せをきっぱり退けて、おのれを顕示することなしに顕示するこの仕方を、私たちは「現象」(*phénomène*) という慎みのない、誇らしげな顕現と対立するものとして、そのギリシア語の語源に遡って、「謎」(*énigme*) と呼ぼうと思う。<sup>(13)</sup>

他者とは私の認識を超えているが、「謎」という「何を意味しているのかは分からないが、何かを意味していることは分かる」<sup>(14)</sup>ものを、何か痕跡のようなものを残していく。この他者の「謎」が私の欲望を賦活することになるという。欲望について内田樹氏は次のように述べている。

レヴィナスは「外部から到来するものに対して開放状態になること」を「欲望を持つ」ということばに言い換えている。

「欲望」(*désir*) ということばにレヴィナスは特殊な含意を与えている。

私たちはふだん「欲望」を「欲求」(*besoin*) と無反省に混同しているが、この二つは、レヴィナスによれば、まったく別の概念である。「欲求」というのは「ほんらいあるはずのものが欠如した状態」を言う。原初の満足が失われたので、その原状回復を求めるのが欲求である。だから、「欲求は本質的に郷愁であり、ホームシックである」と言われるのだ。

これに対して「欲望」は帰る先を知らない異郷感、満たされた状態を思い出せない不満足感のことである。<sup>(15)</sup>

このことは「謎」を追いかけることで、私は他人を《他我》に取り込まなくて済むことを教えている。これをアドラー心理学の文脈で語ると「他者の関心に関心を向け続ける」と表現できるのではないだろうか？そして、「謎」こそが私の関心を他者の関心に向け続けさせる原動力、たどり着くことの決してない他者という地平線に向かって私は関心を迸らせるのである。それが可能となるような魅力に他者は溢れており、「謎」はある種の誘惑となる。

この「謎」というアイデアはアドラー心理学を学ぶ大きな支えとなるように思われる。アドラー心理学を学ぶこと自体が大きな「謎」を与えてくれる。「この場面で子どもを勇気づけるというのは、具体的にどう関わることなのだろうか？」などと、アドラー心理学は、ある方向を示してはくれるが、答えは与えてくれない。答えは自ら絞り出さなければならないのである。

さらに、指導者やグループのコーディネーターのアドラー心理学を学ぶ姿の中には、アドラー心理学の「謎」に魅せられた姿が浮かび上がる。多くのアドラー心理学学習者は、アドラー心理学の「謎」に最初から惹かれるのではなく、アドラー心理学の謎に魅入られた指導者やコーディネーターの姿に憧れたり、「謎」を見る。そしてその状況に憧れ、学ぶうちにいつしか私もアドラー心理学の「謎」に魅せられてしまうという連鎖こそが、建設的な学び方を賦活する。アドラー心理学を学ぶときにはひとりでは学べない。仲間とともに、そして指導者について学ざる得ないという真意はここにある。

### 3 - 3 . 共同体感覚を育成するための課題設定とグループ構造

#### 3 - 3 - 1 . 開いた質問を創造するという課題設定

ARW においてグループメンバー全員に課せられた課題は「かたり手の役に立つ開いた質問を創造する」というものである。この課題は「かたり手」に関しての他我の増殖を促すが、他我の固定化を阻む効果がある。そしてそれは、「かたり手」の他者性を傷つけない。何故なら開いた質問について話し合うという作業は、常に他者の謎に対する敬意を保ちやすくするからである。

また、複数の開いた質問に対して、「かたり手」が答えたいような開いた質問を選べるという構造が ARW の援助力の秘密であろうと思われる。つまり、代替案の選択肢が用意されるのではなく、答えてみたい開いた質問の選択肢が与えられるわけである。これは、「かたり手」の主体性を最大限保証しているアプローチではないだろうか。

#### 3 - 3 - 2 . 「かたり手」「たずね手」「たすけ手」という3種類の役割を取ることの効果

ARW では「かたり手」に直接インタビューできるのは「たずね手」一人だけである。この構造によって「かたり手」は短時間に複数の視点が違う質問にさらされ混乱することは避けられる。また、「たずね手」は必要に応じて「たすけ手」の意見を聴くことができるようになっているため、「たずね手」の援助力が低下しても、グループの援助力の低下には繋がらないばかりか、逆に「たずね手」の援助力が低下したときこそ、グループの援助力が最大限に引き出せるチャンスとなる。しかも、援助の流れは途切れない。

さらに、「たすけ手」は「かたり手」と直接会話をしないという距離が、「たすけ手」メンバーそれぞれのライフスタイルの違いによる「かたり手」についての推量の自由度を高めるとともに、「かたり手」への過剰な影響を抑止できる構造となっている。

#### 3 - 3 - 3 . Lesson 1 の効能について

レッスン1の特徴は「たずね手」が「かたり手」に質問をする際に話せず、紙に書いて質問をするという方法である。また、書かれた質問はボードに貼られていき、これまでどのような質問が成されてきたのかが、「かたり手」「たずね手」「たすけ手」すべてに確認できるという状況が手に入る。このような状況により、視覚的に面接の流れが確認でき、「たずね手」の発する質問



が堂々巡りになったりしにくく、「かたり手」自身も自分の語りが質問の流れからはずれにくくなるというメリットがあると思われる。このようなメリットから Lesson1 はカウンセリングの組み立ての練習方法としても有益であるかもしれない。

さらに、この方法は通常の会話による自助グループやカウンセリングのテンポとは全く異質のテンポを生み出してしまふ。それは、非常にゆっくりではあるが、自然な流れがある。このテンポは、グループメンバーそれぞれの「内的対話」とでも言える状態を保証しているように思える。それは、「かたり手」も「たずね手」そして「たすけ手」も、これまでの自分や他者の発言を反芻するだけでなく、ここで使用された言葉にまつわる様々な意味や記憶を浮かび上がらせながら、自分の中であらたに語り直している（あるいは問い直している）時間を保証しているように思えるからである。これは、ロシアの言語学者ミハイル・バフチン Bakhtin M がいう「言葉の内的対話性」と関係があるのかもしれない。言葉には、なにか対象を指し示す働きがあるが、その言葉は、誰かが前に使った言葉でもある。ある思いを込めて、ある目的をもって使われたその言葉には、その人の「足跡」や「手垢」がついている。つまり、自分の中にある言葉でありながら、他者の言葉でもあり、それがその人の物語を創っている。アドラー心理学風というとその人のプライベートセンスに染まっている言葉使いですら、他者の言葉使いから取り入れたものであり、プライベートセンスの背後には、かつて（？）その人の世界のCOMMONセンスであった言葉なのだという事だ。このことが援助を促進するかもしれないし、あるいは援助の展開を緩やかにするかもしれない。この件も含め、Lesson 1 の効果等については研究の価値があるように思う。

#### 4. 今後の課題について

今回の ARW の方法についての報告は試作品の発表に等しいものです。四国地方会で Lesson 1 を発表以降大きな課題がいくつか指摘されていますが、今回の論考ではそれらを十分に吟味した上で発表することはできませんでした。したがって、指摘された課題をここで整理しておき、より建設的効果的な方法として ARW 機能するように鍛えていきたいと考えています。

ひとつにはうまく動くグループとうまく動かないグループがどうしても出てくるのですが、その違いがまだデータが少ないため把握されていません。今後様々なグループで試行していただいたデータを持ち寄っていただき、より建設的効果的に動く方法に練り上げていきたいと考えています。

また、ARW の思想的倫理課題と理論的課題が混在しておりまだ適切に整理されていないという課題があります。元々 ARW は思想的倫理的な問題意識から自助グループの運営方法やグループメンバーの援助技術をどのように高めていけばよいのかという課題設定から始まっています。ところが、倫理的課題だと認識していたことが、実は理論的理解不足から来ているとの指摘がありました。<sup>[注]</sup> 倫理的課題を話題にすること自体が非倫理的あるいは反倫理的な行動となってしまうというパラドクスのような事象について慎重に検討してみる必要性があります。この問題を考えるにおいて野田俊作氏の次の考えは極めて重要だと思われまふ。

共同体感覚は、ひたすら個人の課題であって、自分に向かって「私は共同体感覚が不足している」ということはできるが、人に向かって「あなたは共同体感覚が不足している」と言うことはできない。まして、広く人々に向かって「共同体感覚を持ちましょう」と呼びかけることなどできない。それはスピリチュアルな概念であって、伝道的な概念ではないのである。「他なるものの苦しみと死を、自分自身の死を気遣うより先に気遣うということ」という私的な決心である。

それは他人に強要できないことであり、みずからひそかに選択するしかないことである。逃げようのないひとりの「私」が、かけがえのないひとりの「あなた」に向かって、「あなたの苦しみを私が背負います」ということである。だから先ほど、共同体感覚は公的にはネオ・プラグマティックなフィクションであるが、私的にはスピリチュアルな概念だと言ったのだ。人々に私と同じように共同体感覚をとらえるように強制することはできない。

しかもなお、それを人々に伝えていかなければならない。そこで私は、グループ療法を好むようになった。そこでは「他なるものの苦しみを、自分自身の苦しみを気遣うより先に気遣う」状況が準備できるからである。<sup>(16)</sup>

果たして ARW が倫理的テーマが抱えているパラドクスを乗り越え「他なるものの苦しみを、自分自身の苦しみを気遣うより先に気遣う」状況が準備できる方法として機能できるか、今後とも研究を重ねていかなければならないテーマだと思います。

それから、ARW はカウンセリング技術を育成するための方法としても可能性を秘めていますが、残念ながらその方法論については理論的技術的曖昧さを抱えたままになっています。何故ならば ARW の理論的技術的な背景には現象学的発想が根強くあり、コミュニケーションの方法論的説明力には現象学的な限界があります。この問題については構造主義的な方法論の導入などを図り、面接技術をもっときめ細やかに説明する方法を開発する必要があります。これは ARW を実施する直前の事前説明の仕方に直接関わってくる問題であり、現時点はその説明方法はまだ非常に粗いと言わざるを得ません。もっときめ細やかなわかりやすい実施方法の解説を工夫しなければなりません。この問題については、十分に研究した上で再度報告をしたいと考えています。

## 5. 最後に

この度の ARW という方法を発表するにあたっては、地元のアドラー心理学研究会と那賀みちの会のメンバーの協力があって土台を作ることができました。また、第一回の合宿ワークショップにご参加くださったみなさん、そして四国地方会に参加してくださったみなさんに感謝いたします。ありがとうございました。また、アドラーネット上で有益なご意見をくださった野田俊作先生をはじめ多くの方々に感謝いたします。ありがとうございました。まだ生まれたばかりの ARW ですが、今後アドラー心理学ムーブメントの建設的な展開に役立てるような方法に鍛えていけるように、多くの方に今後ともご協力をお願いしたいと思います。

どうかよろしく願いいたします。

<sup>[注]</sup> 第9回四国地方会終了後、四国地方会にもご参加くださった野田俊作先生からアドラーネット上で極めて重要なご質問をいただきました。(2007. 3. 7 理論フォーラム「幻想から科学へ」) この質問から始まりました野田先生との議論はこの原稿を執筆中も進行しており、新たな発見が出てきております。今回の原稿にはこの議論から得られました知見を取り入れられるまでに至っておりません。本稿を読まれた読者には、アドラーネット上での議論を是非参照していただきますようお願いしたいと思います。

文献

- [1] 野田俊作：アドラー心理学と子どもの権利. 子どもの権利研究(8)：p.53.2006
- [2] 梅崎一郎：徳島問題に関する報告と考察. アドレリアン 19(3)；p.297-303,2006.
- [3] トム・アンデルセン：「リフレクティング手法」をふりかえって. シーラ・マクナミー、ケネス・J・ガーゲン編：野口裕二・野村直樹訳：ナラティブ・セラピー. 金剛出版、1997.p.115
- [4] 前掲文献 [3] p.94-97
- [5] 前掲文献 [3] p.96-97
- [6] 前掲文献 [3] p.89-90
- [7] エドムント・フッサール：舟橋弘訳：デカルト的省察。世界の名著 51。中央公論社。1970.p.276
- [8] エマニュエル・レヴィナス：合田正人訳：全体性と無限。国文社。1998.p.40
- [9] 内田樹：他者と死者：海鳴社。2004。 p100
- [10] マヌ・バザーノ：野田俊作訳：他者とは誰か？. アドレリアン 20(1),p22,2006
- [11] 野田俊作：アドラー心理学トーキングセミナー. アニマ 2001. 1999.p.126
- [12] エマニュエル・レヴィナス：佐藤真理人他訳：実存の発見。法政大学出版局。1999.p.305
- [13] 前掲文献 [9] p.87
- [14] 前掲文献 [9] p.87
- [15] 前掲文献 [9] p.70-71
- [16] 野田俊作：ポストモダン思想とアドラー心理学. アドレリアン 20(2),p97,2007

#### 更新履歴

2013年2月1日 アドレリアン掲載号より転載